

中国5県絶景の旅②

おわがみやま

「大山・大神山神社奥宮」
——山の神様が待つ石段

「ここに行ってみてみたい」、新聞の日曜版の写真を見た瞬間、そう思った。全国の景勝地を紹介する記事なのだが、昨年の9月1日に掲載されたのが大山。一面に大きく、大神山神社奥宮の写真が載っていた。大きな石段の上に、権現造りでは日本最大級の社がある。正直、魅せられたのは石段。

この巨大な石段を踏みしめて参拝したい——。昨年12月16日、月曜日、木次線ストロールで日登駅取材した後で松江市内で一泊。翌朝、9時半過ぎに大山を目指して車で出発した。国道9号線に出て鳥取県の米子市に向かう。一時間弱で県道24号線との交差点に出る。鳥取県道24号米子大山線、米子

市と大山町をつなぐ県道である。広い駐車場にトイレがあったので休憩した。「岡成池(おかなりいけ)」、解説板によると室町時代に造られた農業用のため池らしい。しかし、江戸時代の享保11年に堤防が決壊、死者74人、倒壊・流出家屋103軒というから大きな人造湖だ。晴れた日に水面に写る大山の写真が紹介されているが、その日は小雨交じりの曇天で、伯耆富士の勇姿は雲の中。カモの群れが悠然と泳いでいる。

県道24号線を大山に向かって走る。正確には、右前方に大山を見上げながらの運転、実際には山裾

が見えるぐらいだったが、霊山の圧倒的な迫力は体感できた。通称、大山観光道路、1963年開通当初は鳥取県初の有料道路だった。1981年に県道となり無料開放された。信号はなく、高原の広大な林の中を走っている感じ。北海道を車で旅行したときの爽快感を思い出した。

日本海に面した米子市から、標高743メートルの大山町の駐車場まで一気に登る。路傍に雪がちらほら見え始めて、それが雪道に変わった。大山寺参道の入り口にある駐車場は雪景色で、厚く積もった雪でタイヤが空回りしてしまい、4WD(4輪駆動)に切り替えることで脱出できた。もしかしたらと用心で持参したトレッキングシューズと厚手の手袋が役に立った。岡成池から15分、時刻は午前11時を少し過ぎていた。

雪の坂道を登った。廃業して朽ちた建物が散在、雨樋が壊れているので巨大なツララが垂れ下がっている。腰痛で手にした杖が、写真を撮るときにいつもは邪魔になるのだが、積雪に杖を突き立てることで両手を自由に使うことができた。冬場の平日なので、人通りはまばら。

大山寺郵便局の先の道を右折して夏山登山口に向かうと、「蓮淨院跡」がある。かつて大山寺には多くの宿坊があり、蓮淨院もその



雪の石段を踏みしめて参拝する



大神山神社奥宮の拝殿の内部



大山寺の本尊は地蔵菩薩で周辺には石地蔵を多数安置



秋の奥宮の石段（フリーサイトの写真を転載）



奥宮の参道脇にある石地蔵

神前で柏手を打って叩頭したが、祈願することが出てこない。平穩を望むことが欲張りな世の中になってしまった。大山寺の石段で見た異邦のカップルの姿を思い浮かべ、日本で楽しい時間を過ごしてもらえぬことを祈った。

一つ。作家の志賀直哉が大正3年に避暑のために滞在、その時の体験をもとに「暗夜行路」の最終章を書いた。余談だが、「暗夜行路」が完成されるまで26年間の歳月を要している。ウィキペディアの記事によると、最初は夏目漱石の依頼で東京朝日新聞に連載する予定が、毎回山場を設けるといふ連載小説の要求に苦心して断念。二度目は大阪毎日新聞に連載が決まり途中まで執筆したものの、「なるべく調子を下げ、読者を喜ばすように書いてほしい」と通俗性を要求され挫折。ようやく文芸雑誌「改造」に連載されるも執筆に苦しんで未完で中断。改造社から「志賀直哉全集」が発行されるのを機に連載を再開し、ようやく完成したのである。

「暗夜行路」を読むと、作者の苦渋がよくわかる。主人公の鬱屈した想いが充満していて、これでは読者も楽しめない。それが、大山に舞台を移してからは、暗夜から抜け出て達観したように、大山の豊かな自然が活写されている。夏の大山も歩いてみたいと思った。

大山寺の楼門に至る石段を、男女のカップルが降りて来る。三十代の半ばぐらいか。冬の装いだ、街角を歩くような格好で靴もスニーカー。雪の石段に苦戦して、女性の足もとがよろけている。男性が腕をつかんで懸命にフォローするのだが、なかなか降りることができないでいる。杖をつくわたしが手助けしようかと迷ったほどで、病的な弱々しさだ。

すれ違うときに挨拶したら、ここやかな女性の笑みにホッとした。中国、あるいは台湾の人だと思ふ。雪を初めて目にしたのかもしれない。病身の妻を連れて、思い出作りのために日本に……、そんな純愛物語を頭の中で勝手にこしらえていた。

楼門からさらに石段を上がり、本堂に参拝。中国三十三観音霊場の第二十九番札所で、本尊は地蔵菩薩。扉や柱が朱色に塗られている部分があつて、どこか神社のような趣（おもむき）もある。

通路に戻って奥に進むと、石の鳥居がある。大神山神社奥宮へ至る道で、自然石を敷きつめた参道は70メートルで日本最長。しかし、その石畳も今は雪の中だ。参拝者を見

守るように、多くのお地藏様が沿道に安置されていて、純白の帽子をかぶって優しく微笑んでいる。

わたしが憧れた、山門の向こうに聳える石段も雪の中。いつの間にか粉雪が舞っている。ゆっくりと足を踏みしめて石段を登る。苔むした大きな狛犬も雪をかぶって、まるで白い冬毛の狼のようだ。

豪雪地帯にある社なので、建物の中に入って参拝できるのがありがたい。解説板によると、主祭神は大己貴神（おこなむちのかみ）、大国主神の若いときの名前だという。大山は太古より神が鎮座する大神山として崇拜されてきたが、奈良時代に修験道、さらには仏教が入り込んで、神仏習合の霊山として栄えた。「平安時代には此の奥宮を中心として三院百八十坊僧兵三千の西日本一の霊山となり」とある。

明治の神仏分離令により「大神山神社奥宮」として純然たる神社となった……、日本の宗教の歴史や宗教観を物語っている。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「原っぱ」

池波正太郎 著 新潮社

「鬼平犯科帳」や「剣客商売」等の時代小説で知られる作者だが、これは最晩年に書かれた現代小説。自分と等身大の、独り暮らしの老劇作家の日常が描かれている。冒頭に、地下道の老いたホームレスが自分の恩師であることに気づき、貧しい小学生時代を回想するのだが、自伝でもあるのだろう。

子供の頃に遊んだ原っぱにもマンションが建ち、親友も地上げで東京を去ってゆく。それでも老劇作家は、かつての大女優に懇願されて、最後の舞台の脚本を書く決意をする。筆致は淡々と枯れているが、ストーリーは老練で飽きさせない。表紙を含めて文中のイラストが直筆で、味わい深い。



「底のぬけた柄杓」

吉屋信子 著 新潮社

10人の俳人の人生が語られている。最初の「私の見なかった人」は杉田久女。「足袋つぐやノラにもならず教師妻」の句が有名。美術教師の妻にあまんじている鬱屈が伝わってくる。田辺聖子の杉田久女伝「花衣ぬぐやまつわる……」を先に読んでいた。精神を病んでの奇行が喧伝される久女だが、瓜笑顔の美人である。



表題作の俳人は尾崎放哉。種田山頭火と双璧をなす自由律俳句の巨人。「底の抜けた柄杓で水を呑もうとした」の句から「底のない柄杓を持って世に生まれて一生その底なし柄杓を離さずにいた人生だった!」。破滅型の生涯は傍迷惑だが、うらやましくもある。

「アマゾンの料理人」

太田哲雄 著 講談社

「世界一“美味しい”を探して僕が行き着いた場所」のサブタイトル。一流シェフを目指して単身海外に。イタリアでは「手先が器用」「勤勉」な日本人が重宝されている。自分の理想の料理を求めて名店を渡り歩く。デザート・シェフに抜擢された店ではマフィアのボスを魅了して親しくなったり、スペインで無給で働いたときは素潜りでタコやムール貝を獲って空腹を凌いだり……。



食の探究者が辿り着いたのが、南米ペルーのアマゾン川流域というのが興味深い。「食の豊かさ」とは、自然の恵みと正面から向き合い自分の血肉にしていくこと。日々の食材に感謝!である。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

ハロー注意報⑭

——進駐軍がいた町のはなし

新春こと始め

松岡初枝

我が家の店は一月二日から開店していた。二日、三日は半日営業だったが、様々な店のおばさんが新年の挨拶廻りをするために、暮れにセツトした髪を直しに來たり、料亭のおかみも四日から営業するので、髪を整えに來る。四日は会社や役所が御用始め、夕方は新年顔合わせがあるのだ。当時の店は職種が異っても、元日を除いて早々と始動する。我が家にも裏口から手拭いやふきんを熨斗紙に包んだのを持って、八百屋、

肉屋、寿司屋などのおじさん、おばさんが新年の挨拶にやってくる。「旧年中はご虫頂いただいて、今年も宜しく：」「こちらこそ宜しく」と懐紙などを渡す。こんな初春の様子を思い出す。

昼近くになると、店にはお客以外のいろいろな人達がやって來る。先ずはめでたい“獅子舞”の社中がやって來る。東京の社中連が町々へ散り“ピーヒャラ スケテンテン”というテンポの速い江戸囃子と共に「お



町一番の売れっ子“かの子” 姐さん

めでとうございます、今年も先客万来！」獅子の口に頭を噛んでもらって、その口の中へ御祝儀袋を差し入れる。お客もワイワイと頭を噛ませ「これで今年も運がいいよ」まずは気の持ちようと言ったところだ。「それにしても江戸囃子は威勢がいいネエ」皆口々に言うが、正月の空気をピンと張るには江戸囃子がぴったりだ。間も無く來るのが“三河万歳”の太夫と才蔵、「商売繁盛でおめでとさん、今年も達者で家内安全めでたやなー」鼓（つづみ）の音も賑やかに、烏帽子大紋姿の大夫の口上が滑稽な動きと共に披露される。「これが見たくて來るのよ」とお客も御祝儀袋を渡す。「毎年沢山にありがとうございませす！」とニコニコ顔だ。しばらくすると外では芸者衆が黒紋付の正装、ひきずりの裾を赤いしごきで絡（から）げ、天紅（てんべに）の舞扇を手に踊りながら道を練り歩く。町の売れっ子芸者の姐さん達も今年お初の晴れ姿で、“お江戸日本橋”や“ひとつとや”など縁起のいい曲を踊ると、やんやの喝采で杵元に御祝儀袋を差し込む。こんな調子で正月二日、三日の町は新春の寿（ことほ）ぎと活気に溢れるのだ。

この新年ならではの日本の風景を、

基地のプレスが放つて置く訳が無い。年末の餅つき、門松立てから始まり、年始の行事や初詣出に行く人の着物姿などはカメラマンの被写体としては申し分の無い素材だったのだろう。それにしても終戦からそんなに年月が過ぎた訳でもないのに、このような活気を見てアメリカの人々はどう思っていたのだろうか。

十日頃には消防の“出初め式”、祖父は若い頃東京で自治消防隊に属していたので、孫達を連れて神宮の絵画館前で行われる消防庁の出初め式に毎年のように行っていた。寒い中の梯子乗りや一斉放水は見事なもので、見物するほうもブルブル震えながらも大歓声や拍手で盛り上がる。帰りにはあったかい蕎麦やうどんを食べるが、そうでもないとい体の震えが止まない。それでも祖父は嬉しそうに毎年出掛けて行くのには理由があった。明治生まれの祖父は、若い頃関東大震災の消火に行ったり、東京大空襲の時は埼玉から助っ人に行ったりしたので、消防の大切さを身をもって経験していた。どんなに寒くても火に立ち向かう消防隊の人々の姿を孫達にも見せたかったのだらうと思う。

正月には他にも遊びに出掛けるこ

とが沢山あった。祖父母は孫達も連れて大相撲の初場所へも行った。当時はまだ蔵前に国技館があつて、土曜の午後あたりで見物する。初場所はどこか華やいでいて、晴れ着の芸者さんや料亭のおかみさんと覚しき人や芸能人の姿も客席に見かけることもあつた。新春寄席にもよく行った。新宿の末広亭や浅草の演芸場、どの寄席も大入りで、いつもは通日で観ていられるが、正月ばかりは中入りの太鼓と共に入れ替えとなる。芸人達も多彩で、常にはあまり出演しない大神楽や曲芸などもあるので、それぞれ張り切りぶりが分かった。売れっ子の落語家達はタクシーで次の寄席へと走り廻ることになるが、食事する間も無い程の忙しさだったらしい。寄席の帰りには何か旨い物

でも食べるのだが、それぞれの好みが違うので、よくデパートの食堂へ行つた。そこは何でもござれの食堂で、和洋中のメニューが豊富であるから好都合なのだ。子供メニューの「お子様ランチ」のチキンライスの上にはそれぞれのデパートのアーキが書かれた小旗が立っていて、その旗を家に持ち帰ってコレクションしていたこともある。中には日の丸とアーキの二本の旗が立っているデパートもあつて、何か得した気分だった。

いろいろな場所へ連れ歩いてくれたことに感謝していたが、どうして我が家はこんなに遊ぶことに貪欲だったのだろうと思つたことがある。ある時祖父に訊いた。「ねえおじいちゃん、皆の家よりどうして出掛けることが多いの?」「うちは大人が皆で働いているだろ、たまに皆で楽しんでまいとバラバラになるからさ。あとは働いたお金は使うことも大切なんだよ。お金は天下の廻り物っていうことさ:」「そうか、天下の廻り物なんだ!」。皆で働いて、楽しく使うことが大切と言つた祖父の言葉の奥には、空襲で焼野原になつた東京へお金を落としかつたからで、戦時中も無事にいられた自分達なので、焼け出された知人や友人の居る東京への思いが強かつた祖父。そういえば祖母も同じような事を言つていた。

昭和二十年代後半になつてもまだ地下道には「浮浪児」と呼ばれ、家も家族も失くした子供や大人がごろごろ居た。地下道には強い悪臭が漂い、幼かつた私は恐ろしい場所のように思えた。「おばあちゃん、上野は怖いよー」と言うと、「それじゃあ鶯谷から円タクで行こうか:」、鶯谷から浅草へは割と近かつた。当時、百円が基本料金なので円タクと言つたらしいが、運転手さんは復員兵だった人が多かつた。「運転手さんはどちらで終戦でしたか?」「フィリピンで捕虜になつてました:」「この子の父親はインドネシアで捕虜でした。よく生還なさつたねえ:」。タクシーはバラック建てが目立つ町を走り、中見世あたりに着く。祖母は料金の倍ほどの料金を渡し「お子さんにお菓子でも買つて下さいな!」「ありがとうございます」。こんな会話も今思うと天下の廻り物を使うのは大切なのだと知つた。



消防隊員姿の祖父



おしゃれをして東京へ (著者)

子供の頃の正月の活気。獅子舞や三河万歳のおじさん達、芸者のお姐さんやお客のおばさん達のあの弾けた笑顔の奥には、大変だった戦時を生き抜き、悲しみを乗り越えた文句なしの命の輝きそのものだったのかなあ、と思えてならない。

「相変わらずここは寒いな」

石油ストーブで両手をあぶりながら、山本文吾さんが不平をもらした。断熱材が入っていない古い建物なので、暖房が効かない。むき出しのコンクリートが夜半の寒気でキンキンに冷やされて、今日のように小春日和の日は、外の方が暖かいぐらいである。

「自分の家で、炬燵に入って本を読んでいけばいいじゃあないですか。だいたいいちは、二月は休みなんですからね」

毎年二月は在庫整理のために休業している。そうしないと、溜まりに溜まった古本を店に出すことができない。

「浦島太郎の昔話に出てくる竜宮城には、四季が同時に楽しめる庭が四方に存在していたそうだ。東には春、南には夏、西には秋、北には冬の景色が存在している」

形勢が悪くなると、珍妙な蘊蓄を持ち出してきては煙(けむ)に巻く。「現代人はもう竜宮城を手に入れたんだ。いつでもエアコンで快適な温度に設定できるし、鯛やヒラメの舞い踊りじゃなくても、テレビやパソコンで好きな番組を見ることができ。いつの間にか時間が過ぎ去って、

鏡を見たら白髪頭の爺さんになってる……」

ニヤリと笑った。

「寒いのも大いにけっこう。冬の寒さを楽しもうじゃないか」

ストーブの天板に置いた缶コーヒーを、手袋をはめた手でつかんで、口に運んだ。フーフーと息を吹きかけながら、熱々のコーヒーをうまそうに口に含んだ。

れも追っかけをやっていた時期がある」

本当ですかと顔を見入った。

「アイドルですか？」
しばらく間が空いて、小さく頷いた。

「おれたちのアイドルだな」

「名前は？」

「乙姫さくら」

聞いたことのない名前だった。

椅子に坐り直した。文吾さんらしいと得心した。

翌日、乙姫さくらのキスマーク入りのポラロイド写真を見せてもらった。お金を払うと、ポーズを決めた踊子の写真を撮ることができそう

だ。

「ポラは一枚、千円だったかな。入場料が三千円だね」

「山川さんへと書いてありますけど？」

「ああ、おれの友達だよ。石部金吉でな。いくら誘っても行かないって。いうから、お土産にするつもりで、あいつの名前を書いてもらったんだ」

地方の温泉地に、学生時代の仲間と遊びに来ていたという。近くにストリップ劇場があると知って、夜になって練り出した。たぶん、名前を聞かれたときにバツが悪くなって、部屋に残った友達の名前を告げたのだろう。

「ソ連が崩壊して間もなくの頃で、ロシア人の女が三人いたな。体はすごいんだが、踊りは素人で愛想がない。AV女優が看板だった。若くてスタイルが良くて、それなりに踊れるんだが、所詮付け焼刃のスクール。

乙姫さま

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑨8

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「推しの子……」

ガラスケースの上に置かれた漫画本を手を取った。店内にはあちこちで、本の山ができています。

『推し活』というのは、昔の『追っかけ』と同じだろ？」

「だと思いません」

断言する自信がないし、興味もない。

「だったら、気持ちはよくわかる。お

「地下アイドルですか？」
「うーん、地下にある劇場にも出てたかな……」

すっかり文吾さんのペースに乗せられてる。

「そろそろホームセンターに木を仕入れに行かないと……」

腰を上げると、まあまあと文吾さんがわたしの肩をたたいた。

「ストリップ劇場の踊子なんだ」



ダンスだ。でも、乙姫さんの舞台は違った。一生懸命、全身全霊で踊っているのが伝わってくる。ズシンと魂を揺さぶられたよ。人生を語る演歌なんだ。命を燃やすブルースなんだよ。彼女、何歳だと思う？」

写真を見た。痩せぎすの引き締まった体に、美人ではないが愛嬌のある笑みを浮かべている。

「三十ぐらいですか？」

文吾さんがニヤリと笑った。

「四十六歳、小屋（劇場）には三十五歳だと言っていたそうだが、舞台ではどんどん若くてきれいな

る。照明もあるんだろうな。『つのだひろ』の『メリー・ジェーン』は名曲だよ。ストリップのために作られた曲だと思えるぐらい、彼女の踊りとシンクロしていた。『メリー・ジェーン』のメロディが流れると、彼女の体に女神が宿るんだ。クライマックスでは歓喜の涙を流すんだが、いつのまにか自分も泣いている……」

しばらく目を綴じて余韻に浸っていた。

「いつもは浅草のフランス座がホームグラウンドなんで、よく通ったよ。永井荷風が命名したというストリップ界の名門だ。井上ひさしが幕間のコントの台本を書いたり、ビートたけしがエレベーターボーイをしながら修行したそうだが、おれが通っていた頃はもう斜陽でお客さんも少なかったな。どさ回りに行くときは、おれたちも一緒に遠征した。『さくら隊』という彼女のファンクラブを作って、ツアーも計画した。舞台が終わったら一緒に飲んで、楽しかったなあ……」

今日も持参の缶コーヒーを口に運んだ。

「五十三歳で引退したんだが、年賀状のやりとりは細々と続いていた。

いつも口紅のキスマークがついていて、奥さんに説明するのに苦労したよ。その年賀状も、二〇一一年が最後になった」

東日本震災の年である。

「息子さんに案内してもらって、彼女が住んでいた家……、といっても津波にさらわれて土台しか残っていないんだが、連れて行ってもらった。できた息子さんでな。わたしは母さんの裸のおかげで大学まで行けたんですと誇らしそうに言っていた。彼が大学を卒業した年に引退したそう。おれは、海に向かかって歌ったよ。その日のために英語の歌詞を覚えたんだ。つのだひろよりもうまく歌えたと思う」

満足そうな笑みを浮かべた。

「そうだ。ストリップ嬢の物語もいな。書店と同じで、ストリップ劇場もどんどん減っている。今のうちに取材に行かないとな。一緒にどうだい？」

わたしは苦笑を浮かべてかぶりを振った。

「おまえも石部金吉だな。まあいい、全国の劇場を廻って、踊子さんのサインをもらってきてやるよ」

自分の名前を使ってくださいなねと、心の中でつぶやいた。

まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL：090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第四部 祭事を見る

一月八日 初薬師

毎月八日で、一月八日を「初薬師」と呼ぶ。縁日の薬師は薬師講に由来するといわれる。

薬師講は、薬師如来の徳を講讃する法会である。薬師如来は東方淨瑠璃世界の教主で、十二の大誓願を發して、衆生のさまざまな病苦を救い、無明の持病を直す法薬を与えるという。

一月十日 初金毘羅

毎月十日で、一月十日を「初金毘羅」と呼ぶ。

金毘羅は、天竺靈鷲曲（てんじくりようじゆせん）の鬼神で、薬師十二神将の一つである宮毘羅（くびら）大将ともいわれる。仏法の守護神、夜叉神王の上首で、その像は武装し忿怒（ふんぬ）の姿をとるが、魚神で蛇の形をし、尾に宝玉を蔵するという。

日本でも、海上の守護神として祀られ、船人が最も崇敬する神となった。この神を祀る香川県琴平の金毘羅宮（写真）は全国的に有名である。江戸時代後期、伊勢参りとと



もに金毘羅参りが大変盛んであった。

一月十八日 初観音

毎月十八日で、一月十八日を「初観音」と呼ぶ。縁日の観音は観音講に由来するといわれる。

観世音菩薩は、慈悲深い徳があつて、世の衆生の救いの求めに応じて大慈大悲を垂れ、三十三身に身を現じるといわれ、一般に「観音」と呼ばれている。

一月二十一日 初大師

毎月二十一日で、一月二十一日を「初大師」と呼ぶ。弘法大師の忌日で、真言宗の縁日。弘法大師は真言宗の開祖で空海のこと。承知二（八三五）

年二月二十一日、六十二歳で入寂した。大師は、朝廷から高僧に贈られる諡（おくりな）。真言宗では初めて空海が弘法大師の諡を賜った。

一月二十四日 初地藏

毎月二十四日で、一月二十四日を「初地藏」と呼ぶ。縁日の地藏も地藏講に由来するといわれる。地藏講は地藏菩薩の功德を講讃する法会。

地藏菩薩は釈迦仏の委託を受けて、その入滅後、弥勒菩薩の出世までの間、釈迦に代わって六道の一切衆生の苦を除き福德を与えるといわれ、特に地獄の衆生を濟度し、代わりに苦しみを受ける菩薩とされる。

一月二十五日 初天神

毎月二十五日で、一月二十五日を「初天神」と呼ぶ。菅原道真の命日にちなむ、天満宮の縁日。

道真は、当時の権力者に圧（お）され、九州でわびしく没した。まもなく都では、雷電、天変地異がしきりに起こった。人々は道真公の崇りと恐れ、朝廷も慰霊に力を尽くした。以後、道真を花蕾天神とする信仰が起こり、また生前すぐれた学者であったことから、天神はいつしか文道の太祖として祀られるようになった。

一月二十八日 初不動

毎月二十八日で、一月二十八日を「初不動」と呼ぶ。特に信者の信仰があつく、不動尊の縁日を毎月の一・十五日・二十八日とするところもある。

堅固で不動の菩提心の威力によって、種々の煩惱・障害を焼き払い、悪魔や迷いのすべてを抑え静め、菩提を成就させ、長寿を得させるといわれ、如来の使者として真言行者の護持にあたるとされている。

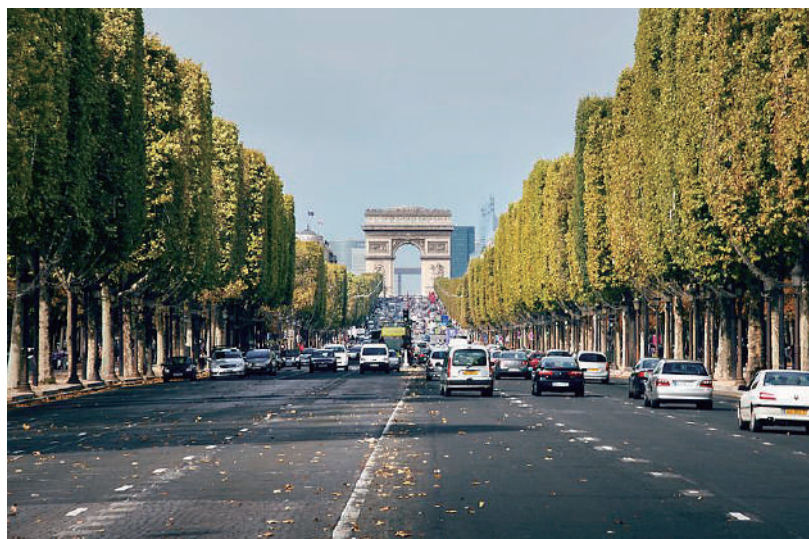
（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。）

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(五)

マック☆ヤマザキ

2月21日(水)パリ、日本発から6日目は自由行動にした。同行の名誉教授K先生はパリのことをよくご存じであった。一人で研究事項をこなされ、美食家であるそうで、シャンゼリゼ通り(写真)に面するレス

トランで旬の生ガキにワインがともおいしかったと言われていた。パリを代表するシャンゼリゼ通りは幅なんと200m、長さ2kmで、“オー・シャンゼリゼ!”という軽快な音楽が日本で流行っていたほどだ。



夜、男子学生からの報告で、3人でエッフェル塔に登って来たそうだ。展望できる階は3か所あり、最上階は高さ276m、674の階段があったそう。ちなみに塔の高さは312mで、東京タワーは333m、タワーの用途は展望デッキと電波を送ることにあつた。後発の東京タワーが、取つてつけたように、20m高いのはいかにも高さにこだわったように思える。エッフェル塔の多くの階段を登り、パリの景色を眺めてくるなんて、一生忘れえない体験で良い思い出になったはずである。

美術館もお薦めだ。ルーヴ

ル(フランス国立)美術館は一日平均入場者が15000人で美術館では世界最多、そのうち約65%が外国人観光客で、インバウンドの観光収入に貢献、38万点以上もの美術品を収蔵している。ルネッサンス期(日本は鎌倉〜江戸時代)の巨匠、レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「モナリザ」、「最後の晩餐」、そして紀元前2世紀ごろ古代ギリシアで制作された彫刻の女性像「ミロのヴィーナス」は見ておくべき。1848年以降に描かれた作品は、鉄道駅舎として使っていた建物を改造して作られたオルセー美術館に、ジャン・フランソワ・ミレーの「落穂拾い」等の作品が収蔵されている。

モンマルトルの丘は、ピカソ、モディリアーニ、ルノアール、ユトリロ、ゴッホなどの芸術家たちが集まって住んでいたところで、パリのどこからでも見える。いまでも多くの芸術家たちが暮らしていて、似顔絵などを描いてくれる。この丘には白亜の寺院がそびえ、夜は照明が施され、パリのどこからでも見える丘なので、ランドマークとして特に夜などは灯台の役割を果たしているように思えた。

観光客を案内、送客している免税

店から仕入れた情報を一覧表にして、学生用にロビーに掲示しておいた。オペラ座界隈で、日本人観光客がよく訪れるラーメン屋があるので出掛けた。日本を離れて一週間にもなると、日本の食事が恋しくなる。私が日本にいるときは、一週間に一度はラーメンを食べていたので、私にとつては「日本食」である。チャーハンとラーメンで約1200円だった。

2日先に利用する航空会社に再確認の電話を入れた。この確認を怠ると、他の人に自分たちの席を売られることがあり、全員で乗れないで違う飛行機に分乗するハメになったりする。免税店の電話を借りて、ロンドンの地上手配業者に連絡、予約を確認。2日前のホテルのトラブルの件も報告して、免税品店に折り返し国際電話を入れてくれるよう依頼した。その電話での交渉で、彼らが完全にミスしたことを認め、迷惑代としてこれから先のドイツ、ハイデルベルグで昼食を提供してくれることで手を打った。学生たちに不便をかけた分の埋め合わせである。

地下鉄とバスを乗り継いでホテルに帰り、明日の出発用に、時間割と注意事項を記してロビーに掲示した。

どらくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

早春の巣箱に棲めるもの見えす

近藤 昌平

デイサービス行くも戻るも雪の中

富久光

朋友の今年かぎりの年賀状

片岡 正人

屠蘇くむや古妻ふるめの手の節を見る

隆愚

着ぶくれの平和大使やスウェーデン

大槇 三代子

白足袋のさばきしなやか初点前てまえ

寺内 龍二

恩讐を笑い飛ばせや恵方巻

赤川 冬人

吾が歳が崑壽くわんじゆになろうとそれとても

松岡 初枝

通過点よと現役の日々

投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「東風解凍」

暦の二十四節気で立春は、今年二月三日です。したがって、七十二候で立春の初候は二月三日から二月七日で「東風（はるかぜ・とうふう）

解凍（こおりをとく）の候」といいます。東から吹いてくる風が厚い氷を解かしていく時期という意味です。「凍」は厚い氷を表しています。東風とは春風の事。でも春風は南から吹く暖かい風なのに、なぜ東風と呼ぶのでしょうか。それはもともと七十二候が中国から渡って来た暦である事の名残りです。中国で親し

まれる陰陽五行の思想で春は東を司るから東風と呼ぶそうです。東から春がやってくると思われられています。ですから東風を「こち」とも呼ばれ、この風が吹くと寒さがゆるみます。

朝東風、夕東風、雨東風、梅東風、雲雀東風、鱒（さわら）東風、など地方によって、さまざまな言葉を冠して親しまれた風です。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花主（あるじ）なしとて春を忘るな

菅原道真

「ネット時代」

赤川 仁洋

前回、ネットカフェのことを書いたが、松江市の店に滞在したときに、なるほどと感心したことがある。

モニター画面のすみに、「今日からタダで入寮OK、1日2食ご飯付き、全国どこでも移動費0円」の文字を見つけてクリックしたら、就職サイトが表示された。①入社前の宿泊先のサポート②交通費の補助③携帯の貸し出し④毎日の食事サポート、と条件が提示されている。スマホも持っていないで、所持金も乏しいネット難民向けの求人なのである。ネカフェの大手チェーンのホー

ムページにリンクされているのだから、いかがわしい会社ではないのだろう。それにしても、どんな隙間にも商機を見出すアイデアは逞しい限り。

ネカフェの食事メニューはこってりしたものも多く、夕食は外に出たが、チェーン店ではモニター注文に無人レジが当たり前になっている。これだと田舎暮らしの老人は、都会に出たら浦島太郎だなどと思う。ネット社会に適応しなくては生き辛いが、阿（おもね）る必要もない。田舎町のどら書房は、客が来ても来なくても変わらない……、変わりようがないのである。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：2月22日(土) 13:30～15:30

テーマ：「自分らしい生き方のできる
地域での取り組みについて」

講師：保村深雪氏

(NPO 法人・癒しの家 苜屋 副理事長)

場所：交通交流施設 1 (JR 庄原駅隣接)

参加費：500 円

(学生 200 円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



東日本大震災復興祈願法要 中山泰造ライブ

日時：3月2日(日)

場所：萬福寺(庄原市是松町227)

TEL：0824-72-0292

※入場無料(会場に募金箱を設置しています)

- スケジュール -

12:00 カレー「キナリ」

チーズ「ふくふく牧場」

額縁「工房アム」

がまぐち「Sora 豆」

オリジナルアクセサリー「うさみみ」

喫茶「萬福寺」(カフェ・マウンテン)

14:00 坐禅と法要

15:00 中山泰造ライブ



中山泰造プロフィール

鋳物職人のかたわら広島を中心に音楽活動を行っている。
汗だくになりながら全身で唄う「満身創痍の吟遊詩人」。
2009年NHK「いのちのうた」出演。金座街商店街のテーマソング「金座街のうた」も手がけている。

編集後記

◇木次線ストロールは
しばらくお休みです。
次に訪問する駅が木次
駅なので、桜の開花の
時期に合わせて取材す
る予定。斐伊川堤防桜
並木を、今度は泊りが
けでゆっくり散策して
みたいですね。

◇音谷健郎さんの連載、倉田
百三の「青春編」と「流転編」、
合わせて今年中に書籍化予
定。どら猫出版プロジェクト
開始です！

◇どら書房は毎年恒例で、2
月は在庫整理で休業、ただし
九日市の日が開店します。棚
を増やしたり、本の入れ替え
をしたりと、やりたいことは
たくさんある……。暗黒地帯
になっっている倉庫部屋から、
少しでも本を店に出せればい
いのですが(苦笑)。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第281回

くんちいち

ひょうばあ九日市

◇ イベント情報 ◇

★ちくちくはうす玉手箱（天野宅）でワークショップ開催★

藁（わら）を使ったミニ箆（ほうき）作成。材料費込みで参加料金は500円です。



2月9日(日)

9:00~13:00

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
2月8日(土)~10日(月) 10時~15時
「中川智晶 帝釈ステンドグラス教室作品展」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き
九日市特製ビタサンド 600円

★アンドカフェ（比婆医院隣接）、2種類のスムージーが100円引き。

★どら書房、休憩室（漫画ルーム）あります！ 無料です。
（※2月は在庫整理でお休み、九日市開催日だけ開店します）

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

